

序章

太平洋島嶼国の都市化への視座

はじめに：私のパプアニューギニア都市との出会い

私がはじめてパプアニューギニアを訪れ、首都のポートモレスビーに滞在したのは、1979年の12月から1980年の8月までの9カ月間だった。文部省の交換留学生として、パプアニューギニア大学の地理学科に身を置き、学生寮で暮らした。大学の修士課程で社会地理学の研究室に在籍していた当時の私は、第三世界の都市化と都市問題に関心があり、そのテーマで修士論文を書こうとしていた。東南アジアの都市をフィールドに考えていたが、「パプアニューギニアが面白いのではないか」という指導教官の一言からパプアニューギニア行きが決まった。パプアニューギニアに調査に行くのは、「未開社会」の好きな文化人類学者と信じていたから、私の戸惑いと不安は大きかった。パプアニューギニアにはたして自分の研究対象とするような「都市」があるのか、というのが、正直な気持ちだった。

ポートモレスビーに着いた時には、もうすでにクリスマス休暇がはじまっていた、キャンパスに学生はまばらだった。入寮の面倒を見てくれた高地のエンガ州の学生に誘われるまま、エンガ州の中心の町ワベクを訪ね、州政府の下級公務員として働く、学生の叔父さんの家に居候して、年末と正月を過ごした。州の中心地といっても、州庁舎のほかには、よろずや風の商店が何軒かあるだけの小さな町だった。皆でトラックの荷台に乗り、ワベクから車

で1時間ほどの村に、シンシンと呼ばれる祭りを見に行った。帰り道、トラックは文字通りの真っ暗闇の道をひたすら走った。車がワベクの町に入るとたん、煌々とした蛍光灯の明かりが眩しかった。村と町との落差を実感した瞬間だった。

パプアニューギニア大学の寮に暮らしながら、ポートモレスビーにやってきた、農村からの移住者の自然発生的な集落を研究対象に定め、「通い」でそれらの集落の調査を始めた。移住者集落は、その歴史と住民の出身地によって居住環境や住宅の質は異なっていたが、その多くは中古の木材を使い、外装は有り合わせの材料を貼り合わせて作られていた。移住の歴史の浅い集落では、単身の男が住民構成の大部分を占めていたが、形成されて20年以上経つ集落においては、女や子供の数も多く、広場を放し飼いの鶏と、子供たちが走り回る光景は、あたかも一つの村が引越してきたかのような印象を与えた。集落には電気はなく、明かりは灯油ランプ、煮炊きも薪か灯油コンロで行っていた。その当時すでに、ポートモレスビー市内には何十ものこうした移住者集落があった。

ポートモレスビーで暮らしていた当時、よく停電があった。真っ暗闇の中、犬の遠吠えだけが聞こえる。考えてみると、ポートモレスビーにある、たくさんの移住者集落はもともと電気もなければ、同じ出身地の人々が集まる「村」のようなものだ。ポートモレスビーは、都市というより多くの村の集合体のようなものかもしれない。電気の消えた寮の部屋の中で、ひとりそんなことを考え続けていた。

第1節 太平洋島嶼国の都市は、「都市」なのか？

——第三世界都市論再考——

本書が対象にしようとするのは、太平洋島嶼国における都市化という問題である。このテーマは、これまで内外の研究者によって十分に体系的に論じ

られてこなかった。そこには、おそらく、この地域の都市化についての、時間的・空間的特質が存在する。すなわち、第1に、この地域における都市化の歴史がきわめて新しいこと、第2に、この地域の都市の規模がきわめて小さく、その中心性においても、景観・土地利用や機能においても、「都市的」な性格が薄弱なことである。

アジアやラテンアメリカの都市の研究者は、先進諸国の都市や都市概念との差異を意識することはあっても、自らの研究対象がそもそも「都市」なのかどうか悩む必要はおそらくほとんどないことだろう。ジャカルタやカルカッタやメキシコシティは、その歴史や景観こそ異なれ、いずれもまぎれもなく世界的な「大都市」である。

私が研究対象としてきたポートモレスビーは、ニュージーランドをのぞけば、太平洋島嶼国中最大の都市であるが、その人口は1990年のセンサスで、20万人でしかない。もちろん総人口400万人のパプアニューギニアという国の中では、ポートモレスビーは、相対的には、圧倒的な「大都市」である。村から戻ってきたときのポートモレスビーは、たとえそれが太平洋島嶼地域中最も治安が悪いと定評があり、夜になると文字通りのゴースタウンになってしまう街であったとしても、都市のもつ「快楽」——多彩な商品の並ぶスーパーマーケット、さまざまな料理を提供するレストラン、居心地のよいホテル、といった——を提供してくれる空間である。しかし、人口規模第2位（8万人）のラエになると、すでにそうした都市のもつ魅力はかなり怪しいものとなる。

ニュージーランドとフィジー（スバ）をのぞく、それ以外の太平洋島嶼諸国には、首都を含め、もっと小さな人口規模の都市しか存在しない。これらは果たして「都市」と呼ぶに値するものなのだろうか。この状況は太平洋島嶼諸国における「都市化」の「遅れ」とみなすべきものなのか。あるいは、「都市」の存在形態の違いなのか。

そうした疑問は、「都市」とは何か？ 都市の本質（「都市性」）——都市を都市たらしめているもの——とはいったい何なのか？ 「都市化」とは、

いかなる時間的・空間的過程なのか？ という、根源的な疑問に行きつく。

地理の教科書風に言えば、「都市」とは、一定規模の人口が空間的に集中し、住民構成においても、土地利用においても、第一次産業以外の産業が大きな位置を占める、すなわち食料生産者以外の住民が多数を占め、非農業的土地利用が卓越するような空間である。「都市化」とは、ローカルなレベルでは、そうした「都市的な空間」が拡大することであり、ナショナルなレベルでは、都市的な空間に住む人口とその比率が増大することである。景観、あるいはフィジカルな側面から言えば、都市とは、道路をはじめとするインフラストラクチュアやさまざまな施設が整備され、集積する空間である。さらに都市を社会学的に定義づけようとする、人口量や密度といった量的側面に加え、住民の「異質性」(Wirth [1938]) や、「匿名性」といった点が問題とされてくる。また、地縁や血縁を超えたボランタリーな組織原理が卓越する社会でもある。

しかし、こうした定義を、単純に非西欧世界の都市に当てはめることができないことは言うまでもない。1960年代以降、社会学・人類学を中心とする第三世界都市を対象とする研究の中で指摘されたのは、都市住民、とりわけ農村からの移住者が、職業や共通の関心・利害を基盤とする「近代的な」組織に統合されるよりは、むしろ、親族、および出身地・民族・言語などを基盤とする「伝統的な」ネットワークに依拠して都市の居住の場や雇用機会を確保しつつ、都市生活を送っていることだった。そうした、農村からの移住者による、出身地の血縁や地縁のネットワークに基づく「農村的生活様式」の持ち込みという現象は、ときには「都市の農村化」や「都市の中の農民」といった言葉で表現されることもあった (Mangin ed. [1970])。しかし、そうした営為は、けっして単なる農村的な文化の再現などではなく、経済的資源が稀少な都市における、底辺の都市住民の生き残りの急務に対応するものであった (Roberts [1978])。

そのような状況は、もちろん西欧の都市社会の中に存在しなかったわけではない。ショバークが述べるように、工業会以前の「前産業型都市」におい

ては、多様な民族構成と、民族的・職業的区分に沿った街区の細分化という現象は、一般的にみられることであった (Sjoberg [1960])。また、1920年代のアメリカ都市を対象に、生態学のアナロジーを用いてモデル化した、パークらシカゴ学派の都市社会学においても、移民コロニーや、民族・人種ゲットに象徴されるような、都市における「自然地域」の存在が指摘されていた。しかし、そこでは、こうした「自然地域」は、その住民の社会的・空間的上昇移動の結果、次第に消滅し、全体社会への「同化」がはかられていくべきものと想定されていた (Park [1926])。

上述のような都市の社会学的概念規定は、ショバークが指摘するように、近代の産業革命以降の西欧都市にむしろ特殊な原理であることは明らかである。しかし、パークの議論にみられるように、そこでは、異なる出自を持つ社会集団、工業化にともなう頻繁な社会・空間移動とそれによる相互作用を通じて、新たな都市の全体社会の理念へと統合されていくこと自体が、「都市」の理想的な姿と価値づけられている。したがって、都市空間—社会はいわば「実体」としてのみならず、一つの「規範」的な価値観やイデオロギーとしての意味をも持つことになった。

そのような西欧中心主義的な都市社会や都市空間の理念、都市計画の規範に照らしたとき、第三世界の都市化過程は、「本来の」都市の発展の過程からは逸脱した、「擬似都市化」あるいは「過剰都市化」としてみなされた。そこでは、工業化が進行しない都市に、フォーマルな雇用が欠如しているにもかかわらず、農村から多くの移住者たちが流入し、血縁や出身地といった出自を自らの唯一の「資源」として活用しながら、都市空間に居住と雇用の場を確保しようとする営み (Kumagai [1987]) と、それが都市の空間形態を規定するという状況が出現したからである。そのような状況は、第三世界諸国の都市行政・計画当局に、それを都市「問題」として認識させ、その排除や解消を図らせることになったのである。こうした都市権力の態度と営為が、西欧中心主義的な「都市」観に裏打ちされたものであり、都市住民の都市での生き残りのための実践を否定し、抑圧するものであったことは、多くの論

者が指摘するとおりである（本書第1章熊谷論文参照）。

ここでは、西欧による植民地化以前に存在した、土着の都市の「伝統」もまた否定されるべきものとみなされた。松田 [1996] は、植民地化以前のアフリカの都市が、西欧的な都市の概念を裏切る「農耕する都市」であり、都市と農村は空間としても混在し連接していたと述べている。松田は、現代のナイロビやカンパラにおいても、移住者による空閑地での農耕という形で、その「伝統」が受け継がれていることを指摘している（松田 [1996] pp.50-52）⁽¹⁾。こうした都市住民の主体的営為と「抵抗」の諸相への注目には、これまでの西欧的な都市や都市化の議論の枠組みを相対化する視座を提供するものであると考える。

そこで重要な点は、太平洋島嶼国を含め、現代の第三世界の都市が、植民地時代に形づくられた物理的・制度的「構造」を、現在も程度の差こそあれ引き継いでいることである。ここでは、植民地支配の歴史とその相違が、それぞれの都市の経済的・社会的・政治的構造の差異に反映されている。言い換えれば、第三世界都市の都市空間と「都市性」が、西欧の「都市性」と異なるとすれば、それは西欧世界によって一方的に移植された都市の枠組みと、その中で在地の人々が作り出す生活実践との間の「ずれ」に由来するものにほかならない。その一方で、独立によって生み出された国家とその行政機能の空間というナショナルな要請と、現代のグローバル化の動きは、これらの都市社会と都市空間を変容させる新たな力として作用している（McGee and Armstrong [1985]）。

太平洋島嶼国の都市空間と「都市性」は、こうした枠組みの中で、再検証される必要がある。すなわち、植民地化の歴史の中で都市がいかにか構築されたのか、それを在地の人々がどのようにまなざし、その枠組みの中でどのような実践を行ったのかという視点であり、さらに、国家としての独立と、近年のグローバル化がこれらの都市の形態と構造をどのように揺るがし、変貌させつつあるのかという視点である。

第2節 太平洋島嶼国における植民地化と都市化の特質

太平洋島嶼地域の都市と都市化についての特質を一言で集約するならば、次のように言うことができるのではないか。すなわち、そこでは、「都市」という存在そのものが、実体としても、また観念としても、あるいは国家や行政当局によっても、またそこに生きる人々自身によっても、日常の生活空間ではない、何か異質で特殊なもの (anomaly) としてみなされてきたという点である。その背景には、この地域における都市化の歴史的過程についての固有の状況が存在する。

まず第1にあげねばならないのは、太平洋島嶼地域においては、都市という存在が西洋文明との接触以前において、ローカルな人々の文化の中に、まったく欠落していたことである。アフリカにおいても、ラテンアメリカにおいても、西洋世界との接触以前に、すでに土着の文化に根ざす固有の都市空間と都市文化が存在していた。もちろん、前述したように、こうした「都市の伝統」は、その後の植民地化の過程の中で、発展・継承されたわけではない。また西欧的な「都市」の観念とその基準に照らせば、それらがどこまで都市としての実質を持つものであったかということについては、議論の余地があろう。しかし、重要なことは、そこでは、少なくとも「都市」という空間を体験しあるいは伝聞していた在地の人々が、たとえ少数とはいえ存在したということである。しかし、太平洋島嶼地域の人々にとって、出自や階層、居住地域を問わず、「都市」はまったく未知のものでしかなかった。

太平洋島嶼地域のローカルな人々にとって、都市という空間は植民地化とともに出現した。それは、「都市の経験」が、すなわち植民地空間の体験であり、西欧文化の体験であったということを意味する。「都市」は、植民地統治のためのセンターであり、そのルールが貫徹する空間であった。さらに人々にとっては、西欧世界との、そして何より西欧人のもたらした物質文明との出会いの場であった。都市の経験が、人々にとってまったく未知のもの

であり、経済的な行為としての意味を持つ以前に、まず純粋に「異文化接触」として存在したという事実は、太平洋島嶼地域の都市と都市化過程の特質を考える上で重要な鍵を提供する。それはすなわち、都市という空間においては、太平洋島嶼地域の人々が、等しく「異文化」（そこでは都市文化＝西洋文化という等式が成立する）を生きることを要求されたということを意味するからである。

第2に、太平洋島嶼地域における、植民地化の時期とその歴史的過程における特質がある。太平洋島嶼地域における西欧世界との接触は、16世紀に始まる。しかし、両者の接触が恒常化し、西欧文明の影響が本格的に、ポリネシアを中心とする太平洋島嶼地域に及ぶのは、18世紀、それも後半に入ってからのものである。メラネシアでは、さらに遅く、19世紀の後半になってようやく、西欧人の定住と植民地化が開始される。

植民地化の時期の遅さは、西欧世界の太平洋島嶼地域への「態度」を大きく規定している。前世紀までに見られたような、先住民社会に対する苛酷な搾取と略奪的支配は、もはやこの時代には、少なくとも表向きは姿を消していた。それに代わり、キリスト教の布教に象徴されるような、「未開の原住民」の教化や文明化が、熱心に唱導された。

こうした「態度」の背景にあるもう一つの理由は、西欧世界にとって、太平洋島嶼地域に、積極的な植民地化を促すだけの魅力的な経済的資源が乏しかったことである。19世紀前半に中国貿易のための商品として価値をもった白檀やナマコも、新大陸の銀などに比べれば、その量も利潤もささやかなものでしかなかったし、奴隷貿易の「商品」となるような人間も希薄であった。オーストラリアのクイーンズランド植民地、およびフィジーやハワイなどでは、サトウキビのプランテーションが、ニューカレドニアではニッケル鉱山が、植民地産業として19世紀後半から展開し、それが植民者にとっての経済的動機を作り出した。またそこに供給される労働者の確保のための、ブラックバーディングと呼ばれる「奴隷狩り」が、ソロモン諸島やヴァヌアツなどで行われた。しかし、これは、太平洋島嶼地域全体から見れば、むしろ部分

的、例外的なことにすぎず、この地域がヨーロッパを中心とする世界経済システムに、本格的にその「周辺部」として統合されることはなかった。したがって、太平洋島嶼地域における植民地支配の最大の動機は、西洋列強の間の国際的な覇権争いと、その中での、この地域のもつ地政学的位置にあったといえる（これは今日に至るまで基本的には変わっていない）。

こうした状況は、西欧世界との接触と植民地化という経験が、太平洋島嶼地域の人々に「苛酷」な結果をもたらさなかったということを意味するものではない。西欧人との接触後の太平洋の島々では、例外なく彼らの持ち込んだ病気による人口の激減を経験しているし、西欧人の持ち込んだ銃火器は、在地の権力の間の抗争を激化させた。また、植民地政府による「統治」は、しばしば暴力を通じた「秩序」の強制をとまなうものであった（熊谷[1988]）。

しかし、ラテンアメリカやアフリカなどの事例を想起するならば、太平洋島嶼地域の内部の差異は大きいものの、ニュージーランドやハワイ、ニューカレドニアなどをのぞけば、植民地化の経験が、在地の人々の経済社会と文化を根源的に解体する力となることは、少なかったといえる。むしろ、そこで働いたのは、しばしば逆のベクトルであった。すなわち、太平洋島嶼地域の住民を、生存維持経済や、それが営まれる空間である「農村」に意図的に留めおこうとする力である。

それは、植民地化による社会的混乱と、土地から引き離されプロレタリアート化する人々を作ること回避することによって、植民地経営にともなう「コスト」を最小限に止めおこうとする「合理的」な政策の所産であった、と見ることができる。生命の再生産の場を「農村」空間に残しながら、若年男性の労働力のみを抽出して、プランテーションや鉱山などの植民地経済の中で搾取・利用しようとする形態、すなわち家族制の一自給的生産様式と資本制生産様式との「接合」というシステムは、アフリカにおいて広範に見られたことは周知のとおりである（メイヤスー[1977]）。しかし、太平洋島嶼地域においては、そうした在地の人々の労働力の引出しの経済的必要と、そ

の空間がはるかに少なかった。そして、そうした限られた資本制生産様式の拠点においても、ハワイやニューカレドニアにおけるアジア系移民労働者や、フィジーにおけるインド系移民の例に見られるように、そうした労働力は、しばしば地域外に求められた。

一方、パプアニューギニアでは、島嶼部のプランテーションへの労働力は、植民地政府との「接触」が行われて間もない、セピック地域や高地（ハイランド）といった、国内の「辺境」地域に求められた（熊谷 [1991]）。そこには、貨幣経済が浸透していないこれらの地域の住民であれば、ほとんど「無償」に近い低賃金で利用—搾取できるという、いわば経済的要因ばかりでなく、こうした「未開の」人々を「文明化」させるという、統治政策も含まれていたことは間違いない。しかし、植民地政府の「原住民労働条例」では、プランテーションでの契約期間は3年以内に限定され、継続的な雇用は禁じられるとともに、契約を終えた労働者は雇い主の手で村に帰することが義務づけられた。都市空間についていえば、建設現場の労働者や家事使用人として働く少数の人々以外は、その周辺村落の住民も含めて、原則としてその中に立ち入り、留まることは認められなかった。こうして、在地の人々は、植民地経済の拠点や都市からは空間的に切り離され、本質的に「村人」であり続けることが求められたのである（本書第1章熊谷論文参照）。

フィジーやパプアニューギニアに典型的に見られるように、植民地支配の早い段階で、在地の人々の手に土地所有権を残すことが定められたことは、人々の社会—文化的な地位を保全する結果に貢献したことは間違いない。しかし、一方で、植民地統治と西欧の物質文明という二つの「力」の発信源であり中心である都市空間から、在地の人々が「隔離」され続けたことは、人々にアンビヴァレントな思いを抱かせることになった。逆説的ではあるが、人々にとって抵抗しがたい圧倒的な「力」の源泉が、人々から空間的に切り離され、その接近が阻まれたことが、メラネシアにおける「カーゴ・カルト」運動（本書第3章棚橋論文参照）に象徴される、西欧世界への「力」への憧憬とその再解釈を通じた接近という実践を創り出したともいうことができ

る。

首長制という形で、在地の権力の源泉が可視的に実在し、そこへの接近の可能性が生得的に定められていた、「階層社会」のポリネシアと、「ビッグマン」と呼ばれる個人の能力と資質によって後天的に選ばれたリーダーが存在する、「平等社会」のメラネシアにおいては、上記の点についての位相は少し異なる。粗削りに言うならば、権力への接近可能性が誰に対しても原則としては開かれていたメラネシアの方が、西欧世界の「力」からの隔離への不満と、そこへの接近を果たそうとする営為への動機はより強いものであった。もちろんそこには、植民地化の浸透の時期やその速度の差、さらに空間的な条件——「環境決定論」的な言い回しをするなら、面積が大きく地形が複雑なメラネシアの島々の方が、「隔離」の度合いが強く、「接近」の可能性もより制約されていた——も作用していたことは確かである。

いずれにせよ、これまで述べてきたところから確認できることは次の点である。すなわち、太平洋島嶼地域の人々にとって、「都市」という空間は、景観的にもまた「制度」としても、新しく、未知のものであり、また西欧世界とその及ぼす「力」と同一視される空間である一方、しかし植民地政策の中ではそこから切り離され、近づくことを容易に許されない、そのような空間であったということである。おそらくはそれゆえに、太平洋島嶼地域の人々にとって、都市は「邪悪な」空間として忌避されるより、むしろより多く好奇と憧憬をとめないながら、まなざされ続けたのだった。

第3節 太平洋島嶼国の国家形成と、グローバル化にともなう都市の位置性の変容

太平洋島嶼地域における都市空間の変化は、まず、第二次世界大戦というグローバルな力が、個別の地域における植民地統治のシステムを貫通することによってもたらされた。大戦中の植民地統治の一時的な弱体化と、在地の

人々の従軍や軍荷運搬人等としての戦争への動員は、それまでの都市空間と農村空間、統治者としての西欧人の世界と非統治者としての太平洋島嶼地域の人々との間の「隔離」の構図を大きく変えることになった。

パプアニューギニアでは、大戦後、戦災からの復興とポートモレスビーの行政機能の拡大にともなう建設労働の需要に引き付けられて、農村から都市への人口移動が増大した。しかし、こうした農村と都市との隔離の減少と、都市で生活するパプアニューギニア人の増加にもかかわらず、原住民労働力に関する法令や彼らに対する住宅の提供といった点では、都市の制度的構造に基本的な変化はなかった。こうした、都市空間の制度的枠組みとそこに生きる人々の現実との乖離が、出身地を同じくする人々による、自然発生的な移住者集落の形成と拡大を生むことになった（熊谷 [1985]；[1994]）。ここでも、前述したような、西欧世界によって移植された都市の枠組みと、人々の生活実践との「ずれ」によって、都市空間の新たな「発展」が生み出されたことが確認できる。

都市の中心性と、都市空間および都市経済・社会の構造は、まずは、国家のあり方によって大きく規定される。太平洋島嶼諸国の共通の特質として、国家が小規模であり、政治的にも経済的にもその自立性が弱いことがあげられる。

太平洋島嶼諸国の中では、人口400万のパプアニューギニア、380万人のニュージーランドが、面積においても、それぞれ46万平方キロメートル、27万平方キロメートルと、大きな比重を占める。しかし、それ以外の国々は面積も、人口も小さく、いわゆる「マイクロ・ステート」に分類される（佐藤 [1998]）。ニュージーランドを除く太平洋島嶼国の独立は、1960年代以降——サモア、ナウル以外は1970年以降——のことであり、他の第三世界の諸地域に比べ、きわめて新しい。また、アメリカをはじめとする域外の超大国が、独立後の現在でもこれらの国々の政治と経済に対し、大きな影響力と支配力を有している。二国間援助は、自前の資源や産業に乏しいこれら太平洋島嶼諸国にとって、不可欠な経済基盤を提供している。

こうした状況は、これらの国々における都市の役割を規定している。独立後も、首都の「中心性」はそれほど大きなものとはなり得ていない。むしろ、ポリネシアやミクロネシアの多くの国々において、首都は、太平洋島嶼地域を超えたより大きな都市システムの一部でしかない。たとえば、ニュージーランドのオークランドは、太平洋島嶼国からの移民のセンターとなっており、各国からの移民の集住地区が多数存在する（本書第7章内藤論文参照）。彼らの出身国において、首都は、行政機能に関わる公務員に限られた雇用を提供する空間にとどまっており、首都の経済や社会は、一国の「中心」として人々を引き付けるだけの規模をもつものとはなっていない。たとえば、サモアを例にとれば、移民の流れは首都のアピアを通過して、隣のパゴパゴ（アメリカ領サモア）、さらにオークランドやシドニー、ロサンジェルスといった世界的な都市へと吸引されていっている。

これに対し、パプアニューギニアのように、国家がある程度の領域と人口規模をもち、国内移動が卓越している国においては、独立以降、首都の「中心性」は確実に高まっている。ニューギニア島南東部沿岸に位置するポートモレスビーは、もともとパプアニューギニアの中心となるには、不都合な位置にあった。国内の道路網が発達していないパプアニューギニアにおいて、内陸部の高地地方や北部海岸からの移住者がポートモレスビーにやってくるには、飛行機に頼るしかない。それでも、高地からの移住者は、毎年顕著な増加を見せている。ポートモレスビーでは、近年、土地権を持たない移住者集落の郊外への拡大や、フォーマルな雇用を持たない都市住民による、いわゆるインフォーマル・セクターに属する経済活動が増加している。これらは、首都のポートモレスビーを国家の「ショーウインドウ」として、都市空間の美化と近代化を進める行政当局にとって、敵視と排除の対象となり、都市空間をめぐる緊張が高まっている（本書第1章熊谷論文参照）。こうした事態は、その規模こそ異なれ、太平洋島嶼国の都市が、他の第三世界の都市と同様の構図を示し始めたことの現れとして注目される。

第4節 太平洋島嶼国の都市化研究の視点 ——メラネシアの場合——

上述のような、太平洋島嶼諸国の都市の存在形態の特質は、これらの地域の都市化をめぐる研究の視点に反映されている。一般的に言って、太平洋島嶼諸国、とりわけメラネシア地域の研究では、植民地化と都市の歴史の新しいさにもかかわらず、人々の移動志向と移動性が高いことが注目されてきた。すでに述べたような、植民地支配下の労働政策と都市での定住を制約する制度的・経済的要因の存在は、人々に都市と農村の間を往復する「還流的移動」(circular migration) という移動の形態を選択させることになった。メラネシア地域の還流的移動の実態と特質を論じたのが、チャップマンとプロセロ (Chapman and Prothero eds. [1985]) である。同書の冒頭の章で、編者は、メラネシア地域における還流的移動の卓越が、過渡的なものではなく、文化に深く根ざしたものであり、居住や社会集団編成、リーダーシップなどに見られる、西欧世界との接触以前からの在地社会の構造の柔軟さに由来するとの見解を示している (Chapman and Prothero eds. [1985] pp.6-10)。ニューヘブリディーズ諸島 (ヴァヌアツ) を対象にした、ベッドフォードの研究 (Bedford [1973]) は、還流的移動の実態を詳細に分析した、優れたモノグラフである。

もう一つの焦点となったのは、農村からの移住者が、都市空間においてどのような社会関係を構築しながら生活を送っているのか、言い換えれば、彼らがどこまで「都市人」であるのか、という問題である。これについては、パプアニューギニア西部高地からの移住者のポートモレスビーでの生活を参与観察に基づきながら活写した、ストラザーンのモノグラフ (Strathern [1975]) をはじめ、パプアニューギニアにおける人類学者・社会学者の研究 (Rew [1974], Levine and Levine [1979]) やフィジーにおける研究 (Griffin and Monsell-Davis eds. [1986]) などがある。

このほか、都市空間形成については、パプアニューギニアにおける多数の都市と町について、その土地利用と空間形成の歴史を記述した地理学者ジャクソンらの研究（Jackson [1976]）が貴重な情報を提供してくれる。ポートモレスビーの都市形成史としては、オラムの研究（Oram [1976]）が詳しい。

パプアニューギニアにおける都市問題に関わる研究としては、ポートモレスビーの移住者集落（Norwood [1984]）、都市インフォーマル・セクター（Barber [1993]）、都市犯罪と「ラスカル」と呼ばれる都市ギャングを扱った研究（Harris [1988]）などが目に付く。最後のテーマについては、都市ギャング集団をメラネシアの伝統的リーダーシップとしてのビッグマン・システムから解釈しようとする視点（Goddard [1992]）もみられる。

第5節 本書の構成とその視座

太平洋島嶼諸国における都市と都市化をめぐる研究は、他の第三世界に比べれば、量においてもその質においても、きわめて限られたものといわなければならない。そのなかで、上述のとおり、メラネシアにおけるこれまでの都市と都市化をめぐる研究の動向は、大きく三つのテーマにまとめられる。第1に、最も数が多いのが、農村―都市間人口移動の実態と、移住者の都市社会での行動様式を分析したもの、第2に、個々の都市についての都市形成史、第3に、さまざまな「都市問題」についてその実態を論じたものである。

本書に収められた論考は、これらのこれまでの都市―都市化研究とは、いささか異なる視座を提供しようとするものである。それは、太平洋島嶼国とその人々にとって「都市」とは何か、「都市性」とはいかなるものか、というより根源的な問いである。

第1章においては、熊谷圭知が、権力と都市住民という視点から、近年のポートモレスビーにおける都市空間をめぐる二つの対立する動きを論じている。それは、行政権力によって推進される首都としてふさわしい都市空間・

都市景観整備の動きと、都市移住者たちが自らの居住空間として作り出す移住者集落（セトルメント）および生計の手段としての都市インフォーマル・セクターの経済活動，である。そこで語られるのは、植民地時代に形作られた都市の制度的・空間的構造が，こうした底辺の都市住民による「生き残り」のための都市空間の独自の利用の必要と同時に，その「余地」を作り出してきたことである。一方で，行政権力によるこれら移住者の排除の動きには，彼らを都市空間の「一時的滞在者」にすぎず，本質的に農村に帰属すべきものとみなす，植民地以来の西欧中心主義的な都市観と統治の思想が反映されている。そこで問われているのは，「都市」という空間が，誰によって，誰のために作られるのか，という根本的問題にほかならない。

第2章では，塩田光喜が，自らの長年の参与観察的フィールドワークに基づきながら，パプアニューギニア高地のインボングの人々の外部世界—都市とのかかわりの歴史的物語を，現金収入獲得活動としての「ビジネス」の隆盛とその変遷に焦点を当て，詳細に語っている。パプアニューギニア高地の人々に見られる政治とビジネスへの並外れた執着とエネルギーは，太平洋島嶼地域の中でもきわめてユニークなものである。3世代にわたる，インボング族のビジネスマンのライフヒストリーを仔細に追いながら，塩田は，彼らの活動とその転変の相違に，単にパーソナリティだけでない，時代の差異を読み取る。そこには，西欧人が持ち込んだシステムを「模倣」し，そのシステムへのアクセスを獲得することによって成功を収めた時代とは異なり，近年の新たな都市的環境の中で，自前の機智とスタイルを生み出し，それを状況に即して展開させていくことによって，自らのビジネスを発展させようとする，いわばパプアニューギニア固有の「ビジネス」文化の生成が見出される。変動の激しいパプアニューギニア都市経済—社会において，華人系の資本などとの対抗関係の中で，彼らの起業家としての活動がどこまで「持続的」なものでありうるかは予断を許さない。しかし，禁欲的なバイブル・チャーチの熱心な信者である新しい世代の起業家の態度には，パプアニューギニア版の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と言ったおもむ

きがある。そこに、新たなパプアニューギニア「都市人」の形成を見ることも可能であろう。

第3章では、棚橋訓が、メラネシアの人々にとっての「都市的なもの」とそれに対する希求の位相に、ソロモン諸島のマアシナ・ルール運動と、パプアニューギニアのマヌス諸島におけるパリアウ運動という二つの社会運動を考察することによって迫っている。両者は、しばしば「カゴ・カルト」運動として、一括して論じられるが、その具体的な内容や展開には差異がある。棚橋が指摘するのは、両者がともに「都市的なもの」と、都市的な空間において実現されるはずの「よりよい生活」へのまなざしを含んでいたことである。ヨーロッパによって持ち込まれた植民地統治のルール——労働・時間・空間の管理統制——が、「都市的生活様式」の中核として抽出されているという、棚橋の指摘は、太平洋島嶼地域の都市と都市化の本質に関する重要な示唆を提供している。

第4章では、白川千尋が、ヴァヌアツの首都ポートヴィラを舞台に、呪術という意表をついた切り口から「都市性」の本質に迫っている。トンゴア島民の間では、ヴァヌアツ随一の都市であるポートヴィラを「邪術の危険に満ちた場所」として認識する者が多い。都市は、経済的な格差とそれにとまなう妬みや不満の渦巻く場であり、また他島出身者という異質な者たちが持ち込む「未知の領分」が遍在する場でもある。しかし、それだけが人々に、都市を邪術と結びつけさせる原因ではない。白川は、トンゴア島民の内部で生じている、「カスタム」をめぐるポリティクスに注目する。キリスト教化し、邪術とは無縁の存在となったと自ら認ずるトンゴアの人々が、一方でトンゴア島の土地権をめぐる、その「正統性」の根拠として「カスタム」の保持を主張しなければならない。こうした中で、トンゴア島民は、邪術という「未知の領分」を外部の人々に委ねる形で、真正な「カスタム」の保持者であることを語るという戦略をとろうとする。白川の語る、邪術の持つ「伝統性」、過去との連続性と「近代性」「都市性」とい二面的性格は、太平洋島嶼地域の人々にとっての「都市」という空間とそこにおける態度の「二面

性」にもつながるものであろう。

第5章では、柄木田康之が、ミクロネシア連邦のヤップ州のオレアイ環礁を事例に、世帯戦略としての人口移動という視点から、離島とヤップ本島との関係性を論じている。ヤップの地域ネットワークの中では、伝統的にヤップ本島と離島との間に階層的関係が存在してきた。今日ではさらに、州都としてのコロニアが行政機能を担い、公務員という雇用機会を提供するとともに、教育・保健サービスを提供する空間として「中心性」を持つことによって、新たな階層関係が生まれ、伝統的階層関係に重ね合わされている。さらにその上位には、より大きな経済機会を提供するグアムの存在がある。オレアイ環礁の人々の移住をめぐるライフヒストリーの分析を通じて柄木田が明らかにするのは、人々の移動において「還流的」移動が支配的な中で、教育サービスと公的雇用の獲得に関わる「長期的」な還流移動と、保健サービスへのアクセスを求めている「短期的」還流移動が存在することである。これらの移動を世帯の「戦略」として捉えることには、柄木田は慎重であるが、主体としての離島の人々が、「都市」がもたらす機能と機会をどのように利用するかという点において、多くの貴重な情報を提供している。人々の移動が経済的機会よりも、教育や医療サービスを求めることをより大きな契機としていることが、援助に基づくヤップ州の社会経済発展の特質が反映されたものであるという柄木田の指摘は、ミクロネシアの都市と都市化のあり方が国家のあり方に規定されていることを示しており、重要であろう。

第6章では、小川和美が、フィジーの都市形成をフィジー系住民の社会との関連で論じる。フィジーの場合、そのほとんどが植民地の行政中心として形成された他の太平洋諸国の都市と異なり、砂糖生産を基盤にして成立した産業都市（シュガータウン）がみられる。また、首都のスバ以外にも、国内に空間的にアクセスが容易な中小都市が多数存在するため、ポリネシアやミクロネシアでみられるような首都を通過して海外都市へと移動するパターンに代わり、都市間移動というパターンがみられることも特色である。フィジー系住民の集住地区の存在と住宅政策の変遷に焦点を当てて、スバの都市空

間の形成史を追いながら、小川は、フィジー系住民の中に、農村との絆を希薄化しながら、都市の近隣関係により基盤を置くような人々が登場していると指摘する。これは、農村と都市との紐帯の保持と還流的移動の卓越という太平洋島嶼地域に支配的な人口移動パターンからの変化を示すものとして興味深い。

第7章では、内藤暁子が、オークランドを中心に、「美しい田園景観」というニュージーランドのイメージとは対極に位置する、都市の諸相を論じている。すでに述べたように、オークランドは、世界的な水準で言えば決して「大都市」ではないが、太平洋島嶼地域の人々にとっては、都市システムの上位に位置する中心性を持った都市である。内藤は、マオリの人々にとっての都市化の歴史と現在の社会問題を紹介しながら、都市に住むマオリの人々の社会的地位とアイデンティティの問題に焦点を当てる。支配者であるヨーロッパ人（パケハ）は、都市にやってきたマオリの人々を、「よそ者」——農村に帰属すべき人々——であり、都市に適応できない「劣った人々」として差別的に扱い、都市マオリの劣位が構造化され、再生産された。注目すべきは、現在のニュージーランドにおけるマオリの権利復興運動に対して、政府による補償金支払いの際、窓口として「伝統」としてのイウィ（部族）が利用されることによって、マオリの人々のアイデンティティが、再び農村を通じて「本質化」されようとする傾向があることであろう。こうした中で、都市マオリの人々の中には、「アーバン・マオリ」（ジェネラル・マオリ）としてのアイデンティティを積極的に主張することで、そうした傾向に抵抗しようとする運動が見られる。

第8章では、大谷裕文が、トンガの首都ヌクアロファの都市空間とその変容を、キリスト教の布教と教化・植民地統治・交易といった実体レベル——大谷の言葉によれば「実効的な用在性」——と、象徴的中心性という表象のレベル——「客体化された表象レベル」——という二つの次元から検証している。大谷の指摘の中でまず興味深いのは、散村形態が支配的であった西欧世界との接触以前のトンガにあって、王の居所であった「ラパハ」が、周囲

の空間とは対照的に、凝集的な空間であり、農耕や漁労などに従事しない階層がその人口の大半を占めていた、ある意味では「都市的」な空間であったことである。西欧世界との接触以降、ヌクアロファはウェズリアン派の布教の拠点として位置付けられ、武器や弾薬を提供することによりキリスト教に改宗した王の異教徒の諸首長との戦争を支援することによって、トンガの統一が生み出される。そして、ヨーロッパ人貿易商人の定住と、ポートタウンとしてのヌクアロファの都市空間の整備が行われることになる。その限りにおいて、ヌクアロファの中心性は西欧世界の力に大きく拠っていた。しかし、それは単に西欧世界の「力」を一方的に甘受させられたものではなく、そこには土着の在来文化と西欧文化との「交渉」の過程と、両者の絡み合いの中で生み出された「折衷文化」が形成されたことを、大谷は強調している。ヌクアロファは、西欧的な景観とファッション、映画館といった、西洋文化の発信源として新たな中心性と祝祭性を獲得することになった。そこには、前述したように、太平洋島嶼地域の人々にとって、都市の体験がすなわち西欧文化の体験であり、人びとによって憧憬をとめないながら表象され、まなざされる空間として都市が存在したことが鮮やかに描き出されている。

本書に収められたこれらの論考において共通するのは、太平洋島嶼地域の人々にとっての「都市」空間と、都市化という時間的過程を、在地の人々のローカルな視点から描き出そうとする視座である。都市という空間と時間が、単なる経済構造やフィジカルな枠組みに還元されるのではなく、人々によって「生きられる」ものとして存在することを考えれば、われわれの方法は、太平洋島嶼国のみならず、都市と都市性をめぐる議論にも重要な問題を提起するものとなると信じる。

〔注〕

- (1) ただし、今日のアフリカ都市における都市農業の拡大については、松田自身も述べるように、近年の構造調整策の影響により、さらにフォーマルな雇用が

減少するアフリカ都市の状況に規定されたものと捉えるべきであろう。それは、「農耕する都市生活」の社会的伝統が今日に生きているものというよりは、現在の困難な経済社会的状況の中での、都市住民の「生き残り」戦略としての性格がより大きいと考える。カンパラで市当局が、植民地時代に作られた「公衆衛生条例」を根拠に、これを「違法な」ものとして、取り締まろうとしているのは、まさに、西欧的な都市計画と都市空間の理念が、現在においても第三世界の都市を支配するエリートの中に脈々と受け継がれ、都市住民の下からの「創造的な生活実践」による抵抗を圧殺しようとしていることの現れにほかならない。松田の言う、都市住民の「都市の飼ひ慣らし」のための営為がどこまで有効性を持ちうるかは、こうした権力との対抗関係によって大きく左右されると考える。

〔参考文献〕

＜日本語文献＞

- 熊谷圭知 [1985]「ポートモレスビーの自然発生的集落—第三世界の都市化と住宅地形成に関する一試論—」(『経済地理学年報』第31巻第1号, pp.1-23)。
- [1987]「第三世界都市研究の問題構成とセグリゲーション」(古賀正則編『第三世界をめぐるセグリゲーションの諸問題』〈昭和60-61年度文部省科学研究費報告書〉一橋大学, pp.1-23)。
- [1988]「タイム・パルス・イ・カム：パプアニューギニア, ミアンミン族における西欧世界との接触と社会変容」(『阪南論集』〈人文・自然科学編〉第23巻第4号, pp.1-20)。
- [1991]「メラネシア世界の変容—地域的多様性から地域格差へ—」(由比浜省吾編『新訂オセアニア』大明堂, pp.248-267)。
- [1994]「ポートモレスビーにおける都市移住者の居住とセグリゲーション—都市・農村関係の視点から—」(熊谷・塩田編 [1994] pp.123-173)。
- 熊谷圭知・塩田光喜編 [1994]『マタンギ・パシフィック太平洋島嶼国の政治社会変動—』アジア経済研究所。
- 佐藤幸雄 [1998]「近代世界システムと太平洋」(佐藤幸雄編『世界史の中の太平洋』国際書院, pp.13-68)。
- 塩田光喜 [1994]「世界史の中のオセアニア」(熊谷・塩田編 [1994] pp.19-59)。
- 松田素二 [1996]『都市を飼ひ慣らす—アフリカの都市人類学—』河出書房新社。
- メイヤスー, C. [1977]『家族制共同体の理論—経済人類学の課題—』筑摩書房。

〈外国語文献〉

- Barber, Keith [1993] *The Informal Sector and Household Reproduction in a Papua New Guinea*, NRI Discussion Paper No.71, Port Moresby: The National Research Institute.
- Bedford, R. D. [1973] *New Hebridean Mobility: A Study of Circular Migration*, Department of Human Geography Publications HG/9, Canberra: Research School of Pacific Studies, The Australian National University.
- Chapman, M. and R. Mansell Prothero eds. [1985] *Circulation in Population Movement: Substance and Concepts from the Melanesian Case*, London: Routledge & Kegan Paul.
- Dinnes, S. [1994] *Praise of the Road and Pass the Ammunition: Criminal Group Surrender in Papua New Guinea*, NRI Discussion Paper No.81, Port Moresby: The National Research Institute.
- Goddard, M. [1992] "Big-man, Thief: The Social Organization of Gangs in Port Moresby," *Canberra Anthropology*, Vol.15, No.1, pp.20-34.
- Griffin, Chris and Mike Monsell-Davis eds. [1986] *Fijians in Town*, Suva: Institute of Pacific Studies of University of the South Pacific.
- Harris, B. M. [1988] *The Rise of Rascalism: Action and Reaction in the Evolution of Rascal Gangs*, IASER Discussion Paper No. 54, Port Moresby: Institute of Applied Social and Economic Research.
- Jackson, R. T. ed. [1976] *An Introduction to the Urban Geography of Papua New Guinea*, Department of Geography, Occasional Paper No.13, Port Moresby: University of Papua New Guinea.
- Kumagai, K. [1987] "Rural-urban Migration and Ethnic Group Formation in a Papua New Guinea Town: The Case of Chimbu Migrants in Port Moresby," *Man and Culture in Oceania* 3 (special issue), pp.221-238.
- Levine, Hal and Marlene W. Levine [1979] *Urbanization in Papua New Guinea: A Study of Ambivalent Townsmen*, London: Cambridge University Press.
- Mangin, W. ed. [1970] *Peasants in Cities: Readings in the Anthropology of Urbanization*, Boston: Houghton Mifflin Company.
- McGee, T. G. and Warwick Armstrong [1985] *Theatres of Accumulation: Studies in Asian and Latin American Urbanization*, London: Methuen.
- Norwood, H. [1984] *Port Moresby: Urban Villages and Squatter Settlements*, Port Moresby: University of Papua New Guinea.
- Oram, N. [1976] *Colonial Town to Melanesian City: Port Moresby 1884-1974*, Canberra: Australian National University.

- Park, R. W. [1926] "The Urban Community as a Spatial Pattern and Moral Order," E.W. Burgess ed., *The Urban Community*, Chicago: University Chicago Press (reprinted in C. Peach ed. [1975] *Urban Social Segregation*, London: Longman, pp.21-31).
- Rew, A. [1974] *Social Images and Process in Urban Papua New Guinea: A Study of Port Moresby*, St. Paul: West Publishing Company.
- Roberts, B. [1978] *Cities of Peasants: The Political Economy of Urbanization in the Third World*, London: Edward Arnold.
- Sjoberg, G. [1960] *The Preindustrial City*, New York: The Free Press.
- Strathern, Marilyn [1975] *No Money on Our Skins: Hagen Migrants in Port Moresby*, New Guinea Research Unit Bulletin No.61, Port Moresby: New Guinea Research Unit.
- Wirth, L. [1938] "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology*, 44.